

## 商業施設におけるベビー休憩室の利用実態調査報告

建築計画

正会員 ○ 仲 綾子<sup>\*1</sup>正会員 谷口 新<sup>\*2</sup>ベビー休憩室 おむつ替え 授乳  
乳児 親子 利用実態

## 1. 研究の目的

乳児との生活において授乳とおむつ替えは重要な行為と位置づけられる。産後は、授乳とおむつ替えのリズムをつかみ、親子が心身ともに安定した生活を送ることが求められる。一方、授乳やおむつ替えに関わる外出環境は近年著しく変化している<sup>1)</sup>。商業施設や公共施設においては、子育て世代の外出支援策の後押しもあり、授乳とおむつ替えができる場所（本研究ではベビー休憩室<sup>注1)</sup>と呼ぶ）の整備が進められている。

このような状況を反映して、建築計画学の領域においてもベビー休憩室を対象とした研究が行われるようになった。北九州市の28事例を対象とした研究<sup>2)</sup>では、現状調査と利用評価アンケート調査をもとに施設を類型化したうえで満足度と評価項目との関連を検討している。首都圏の44事例を対象とした研究<sup>3)</sup>では、現地調査をもとに壁面構成や家具配置等を明らかにしている。札幌市内の43事例を対象とした研究<sup>4)</sup>では、現状調査およびヒアリング調査をもとに建築計画上の検討点を指摘している。しかし、ベビー休憩室を対象とした研究は未だ少なく、また、利用実態の全体像については明らかにされていない。そこで本研究では、ベビー休憩室の利用実態調査にもとづく研究の第一段階として、おむつ替えゾーンを取り上げ、終日の行動観察調査をもとに、その利用実態を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の方法

首都圏の複合商業施設3施設を対象として行動観察調査を実施した。調査対象施設の選定にあたっては、立地および駅からの距離に着目して、都心・駅近型(A施設)、

郊外・駅近型(B施設)、郊外・駅遠型(C施設)の3施設とした<sup>注2)</sup>。調査対象施設の概要を表1に示す。

調査方法としては、各施設とも2014年6月の平日と休日の2日間、開館時刻(10時)から閉館時刻(21時)まで調査員2名がベビー休憩室内に立ち、利用者の行動を観察して調査シートに記録した。

調査項目は、必ず記録すべき必須項目と、余力があれば記録する付加項目を設定した。必須項目は、おむつ替え台の前に到着した時刻と離れた時刻、おむつ替え台の配置と利用状況、同伴者全員の属性、おむつ替え者の属性、赤ちゃんの移動手段、おむつの種類、おむつ替えの体勢、であり、付加項目は、おむつ替え者の年代、赤ちゃんの性別、赤ちゃんの年齢の目安、同伴の兄弟姉妹の年齢、荷物の状況、同伴の兄弟姉妹の行動、同伴者(大人)の行動内容である。属性等は目視により判断した。本研究では、必須項目の結果を示す。

## 3. 結果と考察

調査項目結果の提示に先立ち、各施設の来館者数とおむつ替え台の利用者数との関係を表2に示す。利用人数には母親、父親、兄弟姉妹等を含むが、赤ちゃん本人は含まない。利用組数はまとめて利用するグループを1単位とする。なお、来館者数データは施設側からの情報提供によるものである。

利用人数は各施設とも休日の方が多く、平日の1.6~2.6倍である。施設別にみるとおむつ替え台の利用が最も多いのはB施設であり、休日は383人、平日は243人が利用しており、来館者数の0.5%前後を占める。A,C施設は0.2~0.3%である。おむつ替えスペースの面積あたり

表1 調査対象施設の概要

調査対象施設	施設 の型	施設規模	延床面積	竣工年	ベビー休憩 室の設置階	ベビー休憩 室面積	おむつ替え ゾーン面積	授乳 ゾーン面積	授乳ブース数	休憩等 ゾーン面積
A施設	都心・ 駅近型	地上34階、地下4階	約144,000m <sup>2</sup>	2012年	地下2階	26.0 (m <sup>2</sup> )	6.9 (m <sup>2</sup> )	6.0 (m <sup>2</sup> )	2個室ブース+ 1共用コーナー	13.1 (m <sup>2</sup> )
B施設	郊外・ 駅近型	3棟構成 当該棟は地上3階、地下3階	約51,500m <sup>2</sup>	2010年	1階	74.9 (m <sup>2</sup> )	31.4 (m <sup>2</sup> )	23.1 (m <sup>2</sup> )	3個室ブース+ 2共用ブース	20.4 (m <sup>2</sup> )
C施設	郊外・ 駅遠型	2棟構成 当該棟は地上3階	約83,000m <sup>2</sup>	2008年	3階	65.4 (m <sup>2</sup> )	14.6 (m <sup>2</sup> )	20.9 (m <sup>2</sup> )	2個室ブース+ 1共用コーナー	29.9 (m <sup>2</sup> )

の利用人数をみると、最も多いのが A 施設であり、休日では 20.1 人/m<sup>2</sup>、平日では 12.5 人/m<sup>2</sup>である。B,C 施設では、休日は約 12 人/m<sup>2</sup>、平日は 5~8 人/m<sup>2</sup>である。

以下に、必須項目の調査結果を示す。

### 3-1 おむつ替え台の前に到着した時刻と離れた時刻

利用者がおむつ替え台の前に到着した時刻と離れた時刻の分布を図 1 に示す。平日は 14 時頃におむつ替え台の前に到着した組数あるいは離れた組数が最大となること、休日はピークが遅い時間にシフトして 16 時頃となることは各施設とも共通の傾向である。

この傾向は利用組数が多い B 施設において明快に示されるが、A 施設および C 施設においては午前中にやや利用が多くなり、2 段階のピークと読み取ることもできる。

### 3-2 おむつ替え台の配置と利用状況

各施設のおむつ替え台の配置と利用状況を図 2 に示す。配置によって、おむつ替え台の利用に差がみられる場合と同程度の場合がある。

A 施設では、おむつ替え台 5 台と体重計が設置されている。おむつ替え台のうち 2 台は赤ちゃんを立たせておむつ替えできるタイプ（以下、立ちおむつ替え台）である。利用状況をみると、④、⑤の立ちおむつ替え台の利用は少なく、寝かせておむつを替える一般的なおむつ替え台の 1/10 から 1/5 程度にとどまる。一般的なおむつ替え台のなかでは、①奥側、②中央部、③入口側の 3 台に顕著な利用傾向はみられず、いずれも同程度である。

B 施設では、おむつ替え台 8 台と身長計測台 1 台が設置され、その隣に体重計が置かれている。立ちおむつ替え台はないが、幅が広く座面が低い車椅子利用対応タイプ（以下、ワイドローおむつ替え台）が 1 台設置されている。また、奥の 4 台と手前の 4 台の間におむつ用ゴミ箱が設置されている。利用状況をみると、平日、休日とも利用が最も多いのは⑤のワイドローおむつ替え台である。次いで利用が多いのが⑧である。これは最も入口側に配置されており、アクセスしやすいためと考えられる。さらに④の利用も多い。これはおむつ用ゴミ箱が隣にあるため、好んで利用されると思われる。また、最も奥に配置された①の利用も少なくない。両側がおむつ替え台

表2 来館者数とおむつ替え台利用者数

調査対象施設	調査種別	来館者数(人)	おむつ替え台			
			利用組数(組)	利用人数(人)	利用率(%)	m <sup>2</sup> あたり利用人数(人/m <sup>2</sup> )
A施設	平日調査	41,154	66	85	0.21	12.5
	休日調査	57,680	80	136	0.24	20.1
B施設	平日調査	51,328	206	243	0.47	7.7
	休日調査	62,296	251	383	0.61	12.2
C施設	平日調査	27,000	57	67	0.25	4.8
	休日調査	57,000	116	171	0.30	12.2

\* 利用率(%) = おむつ替え台利用人数(人) / 来館者数(人) \* 100

\* m<sup>2</sup>あたり利用人数(人/m<sup>2</sup>) = おむつ替え台利用人数(人) / おむつ替えゾーン面積(m<sup>2</sup>)

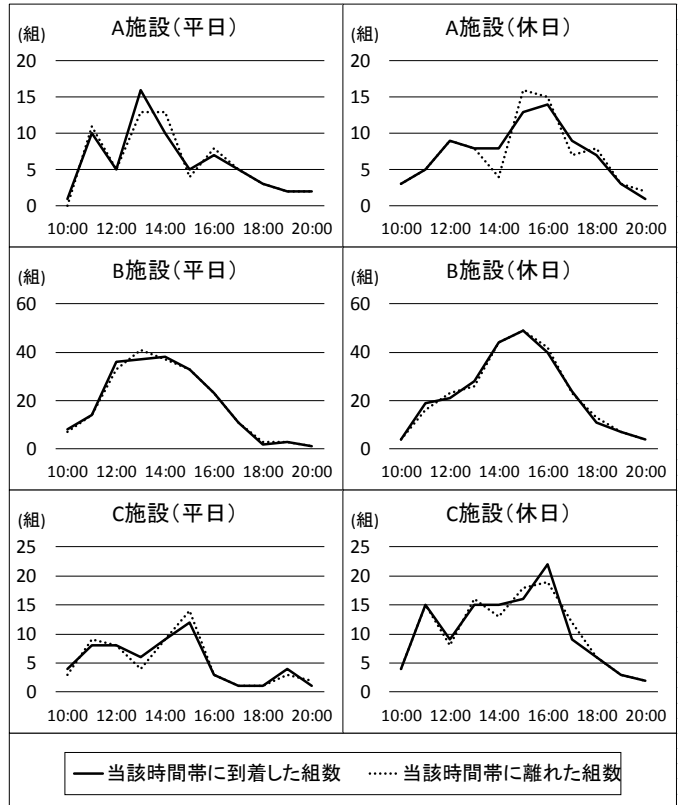


図1 おむつ替え台の前に到着した時刻と離れた時刻

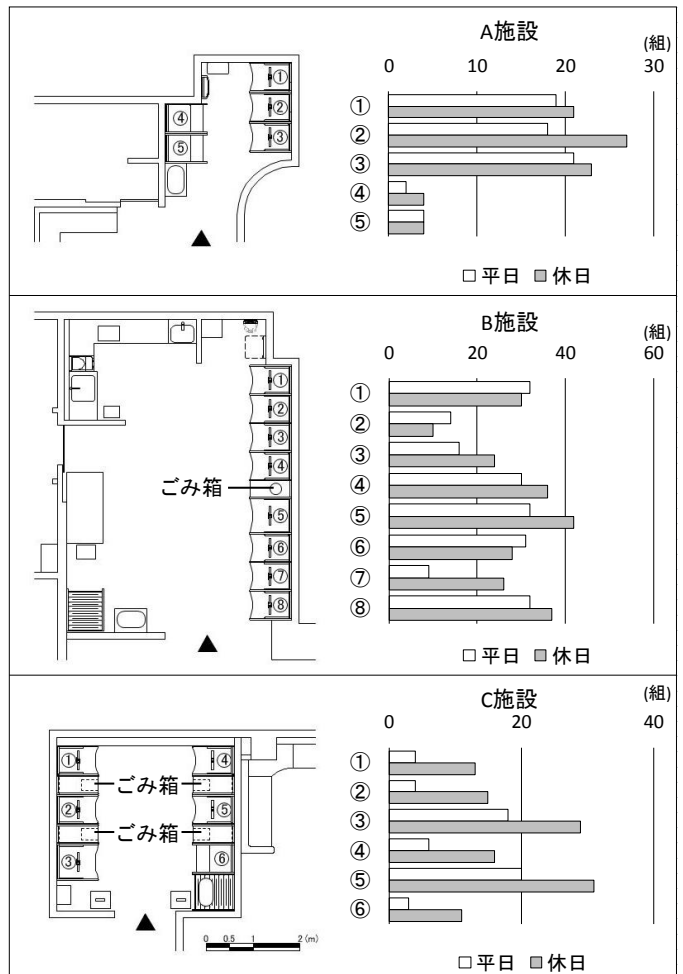


図2 おむつ替え台の配置と利用状況

に挟まれるよりも、片側に空きスペースがある配置が好まれる状況が伺える。

C 施設では、おむつ替え台 6 台と身長計測台 1 台が設置され、身長計測台の上に体重計が置かれている。おむつ替え台のうち、立ちおむつ替え台は 1 台、ワイドローおむつ替え台は 1 台である。おむつ替え台の間には荷物台が配置され、下部におむつ用ごみ箱が設置されている。利用状況を見ると、平日、休日とも利用が最も多いのは⑤である。これは、入口からすぐに目に入る場所に設置されているためと考えられる。次いで利用が多いのは③のワイドローおむつ替え台であり、B 施設と同様の傾向である。そのほかは同程度であるが、⑥の立ちおむつ替え台は利用が少ない。これは A 施設と同様の傾向である。

### 3-3 同伴者の属性

本項目以降の調査項目については、施設ごとに若干の相違はあるものの、顕著な傾向がみられなかったため、3 施設を総合して図 3 にまとめて集計結果を示す。

同伴者全員の属性については（図 3-1）、「母」、「父」、「兄」、「姉」、「祖母」、「祖父」、「その他」に分類して集計した。平日、休日とも最も多いのは「母」であり、平日は約 8 割、休日は約 6 割を占める。次いで多いのは「父」であり、平日は 1 割未満にとどまるが、休日では 3 割を超える。男女共同参画の推進により積極的に育児に取り組む男性が増加する傾向にあるが、おむつ替え台の利用をみても、その傾向を確認できる。

同伴者の組合せについては（図 3-2）、平日、休日とも「母のみ」が最も多く、平日は約 8 割、休日は約 4 割を占める。休日では、父の利用が多くなり、「母+父」は 4 割弱、「父のみ」は 1 割弱の利用がある。

### 3-4 おむつ替え者の属性

同伴者のうち、誰がおむつ替えをしたかに着目して集計した結果（図 3-3）、同伴者の属性と同様に、「母」が最も多いが、休日では「父」も多く約 2 割を占める。「母と父」の組合せで利用して、「父」がおむつ替えを行い、その間に「母」が休憩するという事例もみられた。積極的に育児に取り組む父親の存在が伺える。

### 3-5 赤ちゃんの移動手段

赤ちゃんの移動手段は、「ベビーカー」、「抱っこひも」、「おんぶひも」、「抱っこ」、「歩き」、「その他」、およびこれらの組合せに分類して集計した結果（図 3-4）、平日、休日とも最も多いのが「ベビーカー」、次いで多いのが「抱っこひも」である。休日では、「歩き」および「抱っこ」が増加する。これは父親が利用することにより、「ベビーカー」や「抱っこひも」を使わずに赤ちゃんを連れてくる事例が多くなることを示すものと思われる。

### 3-6 おむつの種類

おむつの種類は、「紙おむつ」と「布おむつ」に大別し、紙おむつでは「テープタイプ」と「パンツタイプ」に分

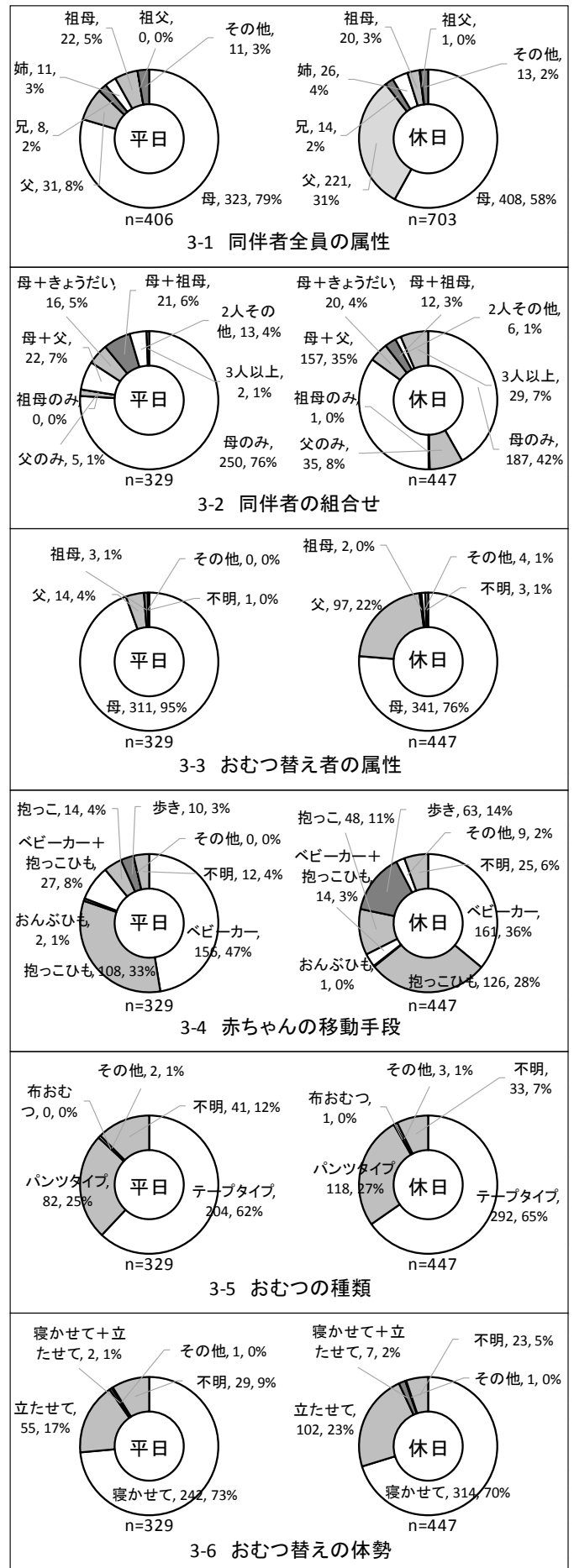


図3 おむつ替え台の利用状況

類して集計した結果（図 3-5）、平日、休日とも「テーブルタイプ」が多く、約 6 割を占める。「パンツタイプ」は 3 割弱、「布おむつ」は 1 例のみである。

### 3-7 おむつ替えの体勢

おむつ替えの体勢は、「寝かせて」と「立たせて」に大別し、さらにこれらの組合せを加えて集計した結果（図 3-6）、前述のおむつの種類と同様、平日、休日とも「寝かせて」が多く、約 7 割を占める。「立たせて」は 2 割弱である。「寝かせて」と「立たせて」の組合せは数%であり、赤ちゃんが動いてしまい、寝かせたり立たせたりしながら苦労しておむつ替えをしている場合に観察された。

なお、おむつ替え台の種類別に体勢を集計した結果を図 4 に示す。当然のことながら、一般のおむつ替え台では「寝かせて」が多く約 7 割、立ちおむつ替え台では「立たせて」が多く約 8 割を占め、用途に適した体勢で利用されていることが確認できた。一方、一般のおむつ替え台で「立たせて」利用する例も 2 割近くみられる。これは転落可能性を孕む危険な行為であり、正しい使用方法の注意喚起について、より一層の検討が必要といえる。

### 3-8 おむつ替えに要する時間

前述の図 1 に示した利用者がおむつ替え台の前に到着した時刻と離れた時刻の分布から、おむつ替え台に滞在する時間を算出した。結果を図 5 に示す。

おむつ替え台の前に立っても、必ずしもおむつ替えをしない場合がある。赤ちゃんをおむつ替え台に寝かせて、あるいは立たせて、おむつが汚れていないか確認したり、赤ちゃんを着替えさせたり、自分の衣服を整えたり、さらに、手遊びをしながら親子であそぶ様子などが観察された。これらのおむつ替えを伴わない事例は、滞在時間が短い方に分布する傾向にあるが、あそぶ場合などは 10 分以上の滞在となっている。

おむつ替えする事例は、全事例数 776 のうち 730 (94%) と大部分を占める。平均値は 4 分 14 秒、中央値は 3 分 57 秒、標準偏差は 2 分 6 秒である。おむつ替えに要する時間は、ばらつきはあるものの、おおむね 4 分前後を目安として捉えることができる。

## 4. まとめ

首都圏の複合商業施設 3 施設を対象とした利用実態調査にもとづき、利用者の属性や行動特性などのおむつ替えゾーンの利用実態を把握した。

ベビー休憩室は近年、急速に整備が進められてきたが、その利用実態はこれまで明らかにされておらず、いわば手探りで計画・設計されてきたといえる。したがって、本研究で示した利用実態報告の意義は大きいと考える。

これらの調査結果をもとに、おむつ替えスペースの具体的な計画指針を策定することを今後の課題としたい。

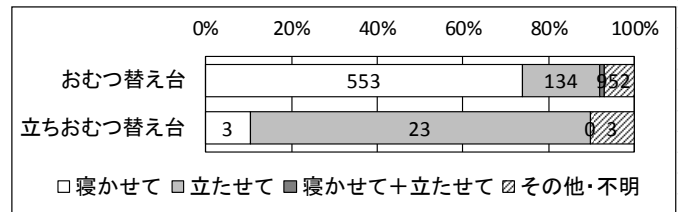


図4 おむつ替え台の種類とおむつ替えの体勢

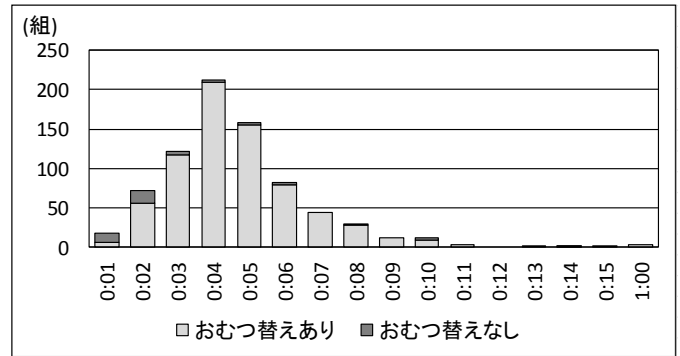


図5 おむつ替え台に滞在する時間の分布

### 謝辞

本研究の調査にご協力いただいた調査対象施設の方々、内田将夫様はじめコンビウズ株式会社の方々、横浜国立大学建築環境工学研究室および大妻女子大学環境情報学専攻の学生、関係各位に記して謝意を表します。

### 注

注 1) 本研究では、一般的に普及していると思われるベビー休憩室という名称で呼ぶが、施設によっては赤ちゃん休憩室、親子休憩室、ベビールーム、ナーサリ、ファミリールームなど、さまざまな名称が付されている<sup>3)</sup>。

注 2) 調査対象施設の選定にあたっては、子育てにバリアフリーにおいて重要な要素となる「移動」に着目して、立地と駅からの距離の 2 点より抽出した。なお、本文中に示した 3 類型に加え、都心・駅遠型も論理的にはあり得るが、予備調査の結果、該当する施設の選定が困難であったため、対象外とした。

### 参考文献

- 1) 国土交通省 総合政策局：安心して子育てができる環境整備のあり方に関する調査研究報告書、2010.3
- 2) 石田さおり、龍有二：北九州市における授乳室の現状と利用評価に関する研究、日本建築学会九州支部研究報告（環境系）第 47 号、pp.21-24、2008.3
- 3) 川野江里子、任智顯、仲綾子、小林美紀、添田昌志：授乳室における空間構成の実態把握と課題の整理、日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）、pp.1051-1052、2010.9
- 4) 田才知未、森傑：男女共同参画からみた親子休憩室の実態と課題—札幌市内における商業施設を対象として—、日本建築学会計画系論文集 第 76 巻 第 666 号、pp.1379-1388、2011.8

\*1 東洋大学ライフデザイン学部人間環境デザイン学科 准教授 博士（工学）

\*2 大妻女子大学社会情報学部環境情報学専攻 准教授 博士（工学）